

史跡 西国街道跡

この石畳の道は、江戸時代の西国街道（大阪く長崎）でこの坂を登った銚ノ埵ほこたおには一里塚がありました。当時は江戸を中心にした五街道（東海、日光、中山、奥州、甲州）に次ぐ重要街道でした。

この街道は毛利時代に次いで福島時代から漸次整備ぜんじされてきました。しかし、宿駅制しゆくえきを定めるなど画期的にこれが整備されたのは、浅野時代に入ってからで、寛永十年（一六三三）幕府の巡見使派遣じゆんけんし、同十二年（一六三五）参勤交代制の確立が契機となったといわれています。

市域を通る西国街道（本往還道）の全長は、七十四町三間（約八・一キロメートル）でした。その道順の概要は鳴川なるかわから玖波くわに入って銚ノ埵を越え、唐船浜を経て馬ためし峠を越えると、玖波の宿場町に入ります。町を通り抜けた街道は、恵川えがわを渡り中浜の山麓伝いに黒川から大膳川だいぜんを渡り、旧大歳神社前を経て中河内、小方おがた、おろしばへと続きます。御園みそのから新町川を渡り、苦の坂を越え木野に入り、小瀬川（木野川）に沿って下り、木野川この渡しから周防小瀬に渡って関戸に通じていました。

街道筋には往還松が植えられ、小方の古胡社ふるえびすしやの下にも一里塚があつて、旅行く人の休息の場として旅に風情を添えていたと伝えられています。